

『碧雲湖棹歌』 訳注 (四)

要 木 純 一

全 学 鷗 松田甲 会津人 住朝鮮 (二百七)

碧波如画一帆飛 碧波 画の如くして 一帆飛ぶ

湖上停橈恋落暉 湖上に 橈を停めて 落暉を恋う

乍見一痕眉様月 乍ち見る 一痕の 眉様の月の

照人詩思上吟衣 人の 詩思を 照らして 吟衣に上るを

〔『碧雲湖棹歌』を読んで私の脳裡に浮かんだ光景〕宍道湖の緑色の波が絵のように美しい、その中を一隻の帆掛け舟が飛ぶようにすすんでいく。(何者か知らぬが、詩人が乗っているのである)やがて、湖の上で櫂を停めた。落日を惜しんでいつまでも見続けているのだろう。日も没して暗くなった、と突然、空に浮かぶ、眉形の三日月一つ。その光線が詩人の服を照らしてじわじわと上っていくのが見える。今夜は良い詩が出来そうだと詩人は思う。

起句、李白『白頭吟』其二「錦水東流して、碧波は蕩らす、双鴛鴦」。南宋の方岳『湖上八首』其四「緑波画の如くして雨初めて晴る」。李白『客の呉に帰るを送る』「酒尽きて一帆飛ぶ」。承句、陳子昂『白帝城懷古』「橈を停めて土風を問う」。また、李白『清溪に入りて山中を行く』「橈を停めて余景に向かう」というのは、この詩の気持ちに近いか。李中(『全唐詩』)『中書湯舎人に献ず』「吟じては江樓に依りて落暉を恋う」。転句、「一痕」は一筋の傷跡。三日月や新月を天の傷と見立てた。これも方岳『梅を探る』「枝南枝北一痕の月」。「眉様」は「眉のような」ではなく、「眉のデザイン」、

すなわち眉を剃ったあとに描いた引き眉のこと。「詩思」は、詩のインスピレーション、アイデア、あるいは作詩の意欲。同じく、韋応物『休暇の日王侍御を訪ぬるも遇わず』怪来（なるほど）詩思人の骨を清からしむ。「人の詩思を照らす」は変な表現だが、月光の神秘的な力によって、詩想がかき立てられる意を籠めていたのであろうか。「吟衣」は、要するに詩人（の姿）のこと。林逋『將に四明に帰らんとして夜坐して話す。任君に別る』別泪吟衣を湿す。「吟衣に上る」は、月があがるにつれ、照らされた詩人の姿がくつきりと現れるようなイメージを描けばよいのであろうか。この詩に描かれている詩人が、永坂石埭、作者自身、剪淞吟社の同人達の誰を指すかと、穿鑿する必要はあるまい。作者は恐らく夢想を楽しんでいるのである。

全 曼陀 郁華 清国（二百八）

碧雲湖上碧雲飛

碧雲 湖上に 碧雲飛び

新婦洲前正落暉

新婦 洲前は 正に落暉なり

絶憶郎官湖上柳

絶だ憶う 郎官 湖上の柳

酒旗風色逼春衣

酒旗の 風色 春衣に逼るを

みどりの雲が正にみどりの雲の湖と呼ばれる六道湖のほとりを飛んでいき、嫁が島の前にちようど夕日がさしかかる頃。そのすばらしい景色を想像すると、我が清国の郎官湖のほとりの柳の様子がことさらに思い出されてしかたがないのだ。そこでは、飲み屋の旗がたなびく景色が、人々に迫り来る。おまえの来ている春服を質に入れて、酒を飲んで行楽をせよと。（六道湖の景色も借金してでも見たくなるようなすばらしいものであろう）

『碧雲湖棹歌』唱和者の中の唯一の中国（清）人。だから、「郎官湖」が出てくる。「郎官湖」については、後の『嫁洲詩碑陰記』の訳注を参照。郁華（曼陀）は、小説家郁達夫の兄。松江は訪れたことはないようだが、当時日本に滞在していた。家郷は浙江省富陽であり、湖北省の郎官湖（当時もはや干上がっていた）を実見したのではあるまい。

『嫁洲詩碑陰記』を受けて、李白が「郎官湖」と名付けたという当時の様子を思いやるとともに、中国人にふさわしく中国の風物を織り交ぜたあいさつ句をものしたのである。わざと語の繰り返しを楽しむ、くだけた作風である。起句、権徳輿『靈徹上人の詩を以て書に代えて寄せるに酬ゆ』碧雲飛ぶ処詩偏に麗なり。承句、北宋の晁端友『多景樓に登る』樓前正に落暉なり。転句、「絶憶」の解釈が悩ましい。「憶いを絶つ、すなわち「郎官湖のことを忘れるぐらいすばらしい宍道湖だ」ということではあるまい。「絶」は「他に絶して（かけ離れて）極度に」の意。司馬遷『史記』梁孝王世家「任皇后絶だ之を得んと欲す」。入谷仙介博士は、「絶えて憶わんや」と反語で読んでおられる。（『山陰の近代漢詩』一三四頁）郎官湖の故事にちなんで、碧雲湖棹歌の詩碑を建てるそうだが、宍道湖のすばらしさは郎官湖なんか吹っ飛んでしまうくらいだ」という方向の解釈であろうか。隋煬帝『望江南』湖上の柳、煙裏垂るるに勝えず。結句は、明らかに、杜牧『江南の春』水村山郭酒旗の風を意識する。「暈」は、文字通り、美しい景色が迫ってきて圧倒される意があるだろうが、「春衣」といえば、杜甫『曲江』二首其一「朝より回りに日日春衣を典す」が思い出されるわけで、ここの方向で解釈した。

全 琴屋 村上寿夫 出雲 剪湊吟社（二百九）

鴛鴦卅六作双飛 鴛鴦 卅六 双を作して飛ぶ

苧望帰帆掛落暉 苧望す 帰帆の 落暉に掛かるを

愁緒如糸長幾尺 愁緒は 糸の如し 長さ幾尺ぞ

為郎欲補緑蓑衣 郎が為に 補せんと欲す 緑の蓑衣

雌雄それぞれ三十六匹のオシドリが仲良く二列で整然と並んで飛んでいる。それに対して私（嫁が島神女）はひとりぼっちでたたずんで、あなたの帰ってくる舟が夕日をバックに帆を掛けて現れるのをじっと待っている。帰らぬ夫を待つ私の憂愁の気持ちは糸のようにいつまでも綿々と尽きることはない。その糸の長さは何尺ぐらいかしら。この憂愁の

糸で、あなたの緑色の蓑の繕いをしてあげることも出来そうよ。とちよつと嫌みを言いたくなるこの頃。

起句の典拠はややこしい。『楽府詩集』所収の古辞『鷓鴣』に「鴛鴦七十二」の句がある。『相逢行』にも同句ありこの句について、宋の何遠が『春渚紀聞』でなぜ「七十二」なのか疑問を呈したのに対して、清の呉景旭は『歷代詩話』で、作者不明の『真率筆記』(『説郭』所収)「霍光の園中に、・・・鴛鴦三十六対を養う」の記述を引いて答えとしている。三十六×二で七十二匹というわけである。「卅(サフ)」は「三(サン)」「十(ジフ)」の合音字。范成大『春日』三首其二「従教(さもあらばあれ)燕子双を作して飛ぶ」「双飛」(双(ふた) つながら飛ぶ)は詩語としてしばしば用いられるので(例えば、李白『双燕離』「双飛して人をして羨ま令む」)、「双飛を作す」と訓ずるべきなのかもしれない。承句、「竚」は「佇」の異体字。「竚望」はずつと立って眺めながら対象を待ち続けること。何仲宣(『全唐詩』)『七夕』賦詠して篇を成す「朝朝佇望して梭を調するに嬾し」。「婦帆」、王維『晁監の日本国に還るを送る』「婦帆但だ風に信(まか)す」。「掛落暉」、吳融「澠池を過ぎて事を書く」「無限の春愁落暉に挂く」。ここの「掛」字は、「帆を掛ける」「帆が掛かる」「落暉が帆に掛かる」等の解釈が考えられるが、いずれにせよ、日が没してもなお夫を待ち続ける神女を思い描けばよい。承句、「愁緒」は心の愁いを乱れた糸の繊維に譬えた。南宋の仲并『憶王孫・秋閨』「愁緒糸の如く尽頭無し」。「補」は、衣服を修繕すること。「緑蓑衣」は、張志和の『漁夫詞』「青の箬笠、緑の蓑衣」を用いる。

全 収軒 井川洌 全 在東京(一百十)

碧瑠璃上白帆飛 碧瑠璃上に 白帆飛び

縹渺湖雲麗晚暉 縹渺たる 湖雲は 晩暉に麗らかなり

繫纜天妃祠畔樹 繫纜す 天妃 祠畔の樹

松風依旧滿吟衣 松風 旧に依りて 吟衣に満つ

みどりのガラスのような水面、その上を白い帆を掛けた舟が飛んでいくように滑っていく。湖をうつつすらと覆う雲が、

夕映えに照り輝いて美しい。その舟は嫁が島神女のはこらのそばの木につながれた。松を渡る風が、昔のように詩人達の服に満ち満ちて来たことであろう。(剪淞吟社の同人達が嫁が島で詩宴を開いている様が目に浮かぶ。今は遠く離れているので参加できないのが残念だ。以前と同じような風流な催しであったことだろう)

起句、「瑠璃」は「琉璃」と同じ。李涉(『全唐詩』)『水月台に題す』『両重の星は点ず碧瑠璃』。「碧瑠璃上」は二字十二字の構造をわざとこわしているが、この点は、蘇軾の『文与可の洋川園池に和す。三十首』の『冰池』碧琉璃下黒蛟蟠る」を真似たと思われる。承句、「縹渺」は遠くかすかに見える様。木華『海賦』群仙縹渺。白居易『長恨歌』山は虚無縹渺の間に在り。『湖雲』常建『西山』湖雲尚お明霽。『晚暉』吳融『新雁』一字横さまに來りて晚暉を背にす。『麗晚暉』はあるいは倒置法で『晚暉麗らかなり』か。いずれにせよ、詩境にあまり違いはあるまい。「麗」は本来あてやかな美しさの意であるが、和訓の「うららか」の方がこの詩にふさわしいように思った。転句、「繫纜」はもと舟を人力で引く綱。「繫纜」で舟を繫いで長く逗留することをいう。杜甫『馬巴州に別るを寄せ奉る』扁舟沙辺に繫纜すること久し。『天妃』は、中国民間信仰における海の女神であるが、嫁が島神女に比した。「祠」は嫁が島の竹生島(ちくぶじま)神社。小さな祠である。草莊『鷓鴣』汨羅祠畔残暉を弔す。結句、范成大『念奴嬌』詞に「一夢三年、松風は旧に依り、蘿月は何ぞ曾て老いん」とある。「吟衣」は第一百六首の注で既述。

全 淞北 信太英

全 在名古屋(二百十一)

雨霽山前霞綺飛

あめは 山前に 霞綺は飛ぶ

画中風景憶元暉

がちゆう 風景 元暉を憶う

扁舟棹過浴溶水

へんしゆう 棹さして過ぐ 浴溶たる水

一任澄波碧染衣

ひとに任せ 澄波の 碧衣を染むるに

雨が晴れ上がり、湖のまわりの山々の前を、陽光を受けた色とりどりの霞が漂っている。この絵の中のような風景は、

謝朓が詠んだ詩を思い起こさせる。我々の小舟はどこまでも続く水に棹さして進んでいく。澄んだ波の緑色の反映が衣を染めるに任せながら。

前半は南齊の詩人謝朓、字は玄暉の『晩に三山に登って還って京を望む』の「餘霞散じて綺と成り、澄江静かなること練の如し」が念頭にある。「霞綺」は、五色に輝く綾錦のような霞であるが、この詩は謝朓詩と違って夕景を写したのではなさそう、単に白い「かすみ」をイメージすべきか。韋莊『薛先輩の寄せ見るる初秋懷抱を寓す、即事に和するの作』の其三に「晩日霞綺を舒す」。「元暉」は、謝朓の字「玄暉」。清朝では、康熙帝の名「玄燁」を避けて「元」を用いる。日本で忌避する必要はないが、剪淞吟社（更には明治詩壇）の清詩趣味が反映したものか。李白は『金陵城西樓月下吟』で「解く道う澄江浄らかなること練の如しと、人をして長しなえに謝玄暉を憶わ令む」と、謝朓のこの詩を称揚する。また権徳輿『富陽陸路』にも「心に謝玄暉を憶う」。「棹過」、李白『雪に対す。酔後王歴陽に贈る』に「清晨棹を鼓して江を過ぎて去る」。「溶溶」は水の盛んに流れる様。杜牧『阿房宮』「二川溶溶として、宮牆に入る」。また同じく杜牧『漢江』「溶溶漾漾白鷗飛ぶ」。「一任」は、「さもあらばあれ」とも訓ずる。杜甫『風生ずれば一えに飄すに任す』。「澄波」は、先の謝朓詩の「澄江」を意識する。「碧染衣」は、先に引いた杜牧『漢江』の「緑浄く春深く衣を染むるに好し」を換骨奪胎したか。

全 桃 踐 渡部寛 全 在濱田（一百十二）

棹破湖光興欲飛

湖光を 棹破すれば 興は飛ばんと欲す

扁舟容与对清暉

扁舟 容与として 清暉に対す

碧雲影漾細漣底

碧雲の 影漾う 細漣の底

髣髴美人颺舞衣

髣髴たり 美人の 舞衣を颺すに

舟に棹させば湖の光は砕け、飛び舞いたくなるような楽しさ。小舟はのんびりとすすんで清らかな日の光を浴びてい

る。緑色の雲の影が水面に映って、細いさざ波の下の方でゆらゆらしている。まるで、美人が踊って衣をひらひらさせているかのようだ。

冒頭は「棹は湖光を破りて」と訓ずるべきかもしれない。「容与」は、双声のオノマトペ。ゆったりのびのびした意が基本。ここでは静かに移動する感じ。宋玉『神女賦』時に容与として而して以て微かに動く兮。班固『西都賦』大路鳴鑾は容与として徘徊す。陶潜『閑情賦』歩は南林に容与たり。「清暉」は日の清らかな光。謝靈運『石壁精舍より湖中に還りて作る』山水清暉を含む、また「清暉能く人を娛しましむ」。「影漾」、権徳輿『酬陸四十楚源……』潭影霞月に漾う。「細漣」、徐鉉『石涉港に臨む』微風細漣を起こす。「颺舞衣」、白居易『嚴十八郎中……』朱欄に舞衣を飄す。「颺」は「飄」の異体字。

全 秋圃 中嶋謹 全(一百十三)

新婦洲辺夢久飛

新婦 洲辺に 夢は久しく飛び

扁舟重共棹斜暉

扁舟 重ねて共に斜暉に棹さす

檢来多少萍蓬感

檢し来れば 多少の 萍蓬の感ぞ

墨暈酒痕前度衣

墨暈 酒痕 前度の衣

夢を見た。嫁が鳥あたりをずーと飛び回っているうちに、いつしか、私は、この前の時のように、夕日を浴びながら、再びみなと一緒に小舟に棹さして湖面に浮かんでいた。おやおかしいぞ、とふと我が身を省みれば、何だか、浮き草、転蓬のようなとりとめもない気持ちだ。服を見ると、墨のしみや酒のこぼれた痕。この前六道湖で遊んだ際、詩をひねっているうちに汚したあの服のままじゃないか。

六道湖上、吟社で催した詩酒の会のさまを、夢の中で今一度思い出して懐かしむという趣向と考えて解釈した。「重共」は、散文的な表現で、詩語としてはぎこちない気がするが、夢の中で「重ねて」、剪淞吟社の面々と「共に」遊び

たいという気持ちに特に強調したかったのであろう。「檢来」というのもあまり見かけない表現。白居易『新たに梅を栽う』「花時に到るまで点検し来たらんと欲す」という用例はあるが、夢の中で、仔細に自問自答している中に、ふと夢であるということに気がつくという、よくある経験を表現しているのだろうか。「萍蓬」は、杜甫『將に巫峡に別れんとして、南郷兄に濃西の果園四十畝を贈る』に「萍蓬定居無し」とあるように行方定めぬ旅人の譬え。ここでは夢の中の不安、不審な気持ちを指すと考えた。「感」の字の使い方は変だが、夢中のとりとめもない「感じ」を表す工夫か。「墨暈」、蘇軾『墨花』「花心墨暈を起こす」。「酒痕」、白居易『故衫』「襟上に杭州の旧酒痕」。この白居易の詩は、結句の意に近いであろう。「前度」と言えは、劉禹錫『再び玄都觀に遊ぶ。絶句』の「前度の劉郎今又来る」が有名。これも、「この前の私が、また夢魂となつてこの宍道湖に帰つてきたよ」というような意をこめているのかも知れない。

全 活処 田代習 全(一百十四)

湖波万頃白鷗飛

湖波こは 万頃ばんけい 白鷗飛はくおうとぶ

垂釣生涯愛晚暉

垂釣すいぢょうの 生涯しょうがい 晚暉ばんきを愛すあい

寄興淡烟疎雨裡

興きようを寄すよ 淡烟たんえん 疎雨そいうちの裡うち

百年有此一蓑衣

百年ひゃくねん 此この 一いつの蓑衣さいい 有り

宍道湖の波が何万頃も広がる中を白い鷗が飛んでいく。釣りをして日々を暮らす私は、落ちていく夕日を眺めるのが大好きである。夕日にもやが薄くかかりぱらぱらと雨が降る中にいるのも、これまたなかなかおもしろい。私の人生百年、身につけるものと言つたらこの一着の蓑があるだけだ。(が雨に濡れても大丈夫だし、愉快な日々だよ)

「湖波万頃」、庾信『周大將軍司馬裔神道碑』に「澄波万頃」とある。范仲淹『岳陽樓記』「一碧万頃」も意識するだろう。南宋の喻良能(『香山集』)「楊廷秀郎中の西湖に遊ぶに次韻す。十絶」の第一首に「湖波万頃鎔銀を瀉ぐ」とあるが、関係あるかどうか。「垂釣」は太公望の故事でもわかるように隱者の象徴。孟浩然『洞庭に臨む』「坐ろに釣(つりいと)

を垂るる者を観る」。「愛晚暉」、権徳輿「従叔將軍宅に薔薇花開く。太府韋卿の壁に題する長句有り。因りて以て和して作る」。「蝶は低枝を繞りて晚暉を愛す」。「寄輿」は興味を向けること。「淡烟疎雨」は、白居易「江樓晚眺」に、景物鮮奇なり。吟翫して篇を成す。水部張員外に寄す「淡烟疎雨の間」を用いる。「百年」は人の一生。杜甫「登高」百年病多くして独り台に登る」を想起せよ。後半二句は、そんな自分の姿が、なかなかすてきな絵になるじゃないかというような、興味を感じているのかも知れない。あるいは「百年此（の晚景）有り、一蓑衣（を着た私）には」と訓じて、貧しいながらも生涯六道湖の夕日を愛で続けられる幸福をかみしめていると、解するべきか。

全 井蛙 井上留 全（一百十五）

棹歌 一曲白鷗飛 棹歌 一曲 白鷗飛ぶ

万頃湖波拖暮暉 万頃の 湖波は 暮暉を拖く

借得高人裁剪手 高人の 裁剪の手を 借り得て

与誰分領碧雲衣 誰とか 分領せん 碧雲の衣

棹つく船頭が舟歌を一曲歌い始めるや白い鷗が飛び立った。どこまでも広がる六道湖の波が、夕日を反映している。あたかも、今にも落ちそうな夕日を引きずっているかのようだ。（永坂翁の碧雲湖棹歌によって、六道湖の風景は一層美しくなったようだ）立派な裁縫の名手の力を借りて作っていた、この緑の雲でできた美しい服を、誰と共にご下賜していただくことにしようか。（永坂翁に作っていた名歌に、我ら吟社の面々も和して、六道湖の美しさを享受しあおうではないか）

「棹歌一曲」、元の劉因「宋理宗書宮扇」棹歌一曲白雲の秋。「万頃湖波」は第一百十四首の「湖波万頃」をひっくり返して用いた。周岳秀（『全唐詩』所収「君山祠」湖波万頃碧天を浸す。「拖」は引きずる感じ。承句で、訳者は夕日の反映が綱の如く一直線にこちらに伸びている様をイメージするがどうであろうか。「分領」は、元来官吏が職務を分

担すること（日本語では更に領地を分けること）で、詩語としてはいかがかと思いが、「碧雲衣」（六道湖の美景）をみんなで山分けして楽しむということをも、かしこまって言うおかしさを狙ったのであろう。

全 適処 並河理 全（一百十六）

白鷗飛処白帆飛

白鷗 飛ぶ処 白帆飛ぶ

極浦長汀帶暮暉

極浦 長汀 暮暉を帯ぶ

湖鏡照看新婦影

湖鏡 照らして看る 新婦の影

碧雲揺曳似春衣

碧雲 揺曳すること 春衣に似る

白い鷗が飛ぶあたりに白い帆を張った舟が飛ぶように湖を横切る。ズーと向こうまで続く長い浜辺が暮れなずむ夕日を浴びている。湖を鏡に見立てれば、そこに映るのは新婦たる嫁が島の影。そして緑の雲が、いわばその新婦の春の衣装のごとくゆらゆらたなびくのも映っている。

起句、楊万里『農家六言』白鷗の飛ぶ処は極浦。承句、「浦」は浜辺。『楚辭』九歌・湘君『涪陽の極浦を望む』。その王逸の注に「極は遠也。浦は水涯也。謝靈運『白石巖下の徑にて行田す』万里長汀に瀉ぐ。「極浦」、「長汀」は結局どちらも同じ六道湖の浜辺のことで、重複して用いることによってその長さを強調したか。転句、湖を鏡に、嫁が島を新婦に譬える。李紳『望海亭』湖鏡坐する隅に匣の満ちたるを看る」。庾信『擬詠懷』匣中より明鏡を取り、函を披いて自ら照らして看る」。結句、「揺曳」はゆらゆら揺れる様。双声の語。清江（『全唐詩』）『月夜黃端公を懷う有り。兼ねて朱孫二判官に簡す』野雲揺曳して本機無し」。

全 秋濤 渡辺忠男 全 伯耆人（二百十七）

春潮来去鷺鷗飛

春潮 来去して 鷺鷗飛ぶ

湖鏡開奩挹晚暉
争剪淞波涼幅幅
無辺絢爛是天衣

湖鏡 奩を開きて 晚暉を挹む
争いて 淞波を 剪る 涼幅幅
無辺の 絢爛 是れ天衣

春のうしおが満ちたり引いたりするなかを鷺や鴟が飛んでいたが、暮れ方になると、宍道湖は夕日の光をくみ取って、突然化粧箱を開いたときの鏡のように輝き出す。さあ急げとばかり、何者かが五彩に輝く宍道湖の涼しげな波を一幅ずつ切り取って、無限に広がる絢爛豪華な衣装を作りあげた。これぞ天女たる嫁が鳥神女にふさわしい着物だ。

起句、南宋の陳淵『錢清堰にて潮を待つ』「江湖来去すること自ずから時有り」。「鷺鴟」は「鷺鷥」というのが普通。平仄を合わせるためにひっくり返した。承句は、(それまで光っていないなかった)湖面が夕日を受けて急に輝くのを、化粧箱を開けて、中に入っていた鏡が輝くさまに譬えたのであろう。「挹晚暉」は、光を液体視した奇抜な表現。湖水の縁語として「挹む」を用いたか。『詩経』小雅『大東』「維れ北に斗有るも、以て酒漿を挹む可からず」。陸雲『呉故丞相陸公誄』に「挹暉茂朴」とあるが、ここと関係があるかどうか不明。転句も、奇抜。「一幅一幅の涼しい淞波を剪る」というべきところを、語順を入れ替えて詩的な表現とした。「争(いか)でか淞波の涼幅幅を剪らん」と訓じて、「どうにかして宍道湖の涼しい波を切り取ったら、嫁が鳥神女にふさわしい服を作ることができるのに」という方向で解釈すべきかも知れない。剪淞吟社の名の由来となった、杜甫「戯れて山水を画く図に題する歌」焉くにか并州の快剪刀を得て、呉松半江の水を剪り取らん」を典故として用いていることはいうまでもない。

全 思齋 本田嘉種 全 熊本人(二百十八)

水明沙白碧鱸飛
垂釣無心对落暉
泛宅江湖婦未得

水明かに 沙白く 碧鱸は飛ぶ
釣を垂れて 無心に 落暉に對す
宅を 江湖に 泛べて 帰ること未だ得ず

斜風細雨緑蓑衣

斜風しゃふう 細雨さいう 緑の蓑衣みどりさゐ

湖面が晴れ渡り砂浜が白く輝く中、緑色をしたスズキが飛び跳ねる。夕日を浴びながら無心に糸を垂れて釣りをする人。彼は舟をすみかとして各地を転々とし、故郷に帰ることができないままであるのだ。斜めに吹き付ける風と小雨に濡れそぼつ、その緑色の蓑。(故郷熊本を離れて、ここ松江に逗留している私の姿)

起句、明の何景明『岳豫之小画』四首の其三に「水明かに沙白く風濤静かなり」とある。中国における「鱸(ロ)」は、所謂「松江(しょうこう、今上海市に属する。または、呉淞江の雅名ともいう)之鱸」で、ハゼに似たカジカ科のさかな。我が松江(まつえ)もたまたま「鱸(スズキ)」が名物であるが、これはハタ科の近海魚で、夏に汽水域の宍道湖に上ってくる別種である。張耒『蛩を聞きて感有り』に「我東のかた帰りて碧鱸を鱸せんと欲す」とあるが、これも「松江之鱸」。ただ、「スズキ」も緑色だといわれればまあ緑色であり、おなじ「松江」の縁もあるので、詩語として「碧鱸」を用いるのに差し支えはあるまい。承句、「垂釣」は第一百十四首で既述。王維『山居即事』蒼茫として落暉に對す」。転句は、唐代の隱者張志和を意識する。顏真卿『浪跡先生玄真子張志和碑』(『旧唐書』の張志和伝にも引く)によれば、彼は肅宗に仕えたが、後に官を辞めて、「遂に扁舟もて垂論し、三江に浮かび、五湖に泛かぶ。自ら烟波釣徒と謂う」。その舟がぼろぼろになっていたので顏真卿が替えてやろうと申し出ると、「儻し漁舟を恵まば、願わくは家を浮かべ宅を泛かべて、江湖の上を沿沂せん」と答えたという。南宋の釈道璨『馮深居常簿を哭す』「宅を泛ぶ江湖の上」。「江湖」は、文字通り川や湖だが、政治の中心を離れた隱棲の場としてのニュアンスがある。司馬遷『史記』貨殖伝「范蠡は扁舟に乗りて、江湖に浮かぶ」。「帰未得」は、散文なら「未得帰(未だ帰るを得ず)」の語順となる。単に語順を変えただけでなく、「帰りたいと思うけどまだ帰れない」というじりじりした感じが出る。杜甫『江亭』故林帰ること未だ得ず」。結句はまさに隱者張志和の『漁夫詞』青の蓑笠、緑の蓑衣、斜風細雨帰るを須いず」をほとんどそのまま用いる。

全 松軒 藤脇善政 全(一百十九)

長天側目送鴻飛 長天 目を側めて 鴻の飛ぶを送り

揮罷五弦將夕暉 五弦を 揮い罷われば 將に夕暉ならんとす

自有浩風詩思在 自ずから 浩風の 詩思在る 有り

又依江閣一振衣 又 江閣に 依りて 一たび衣を振う

何処までも続く空、目を上げて、白鳥が飛んでいくのを見送る。五弦の琴をばらんぱらんと弾き終わると、早夕日が射す頃合い。広大な湖をわたる風に吹き付けられるうちに、自然と壮大な詩心がかき立てられてきた。そこで、さらに、川そばの料亭に入って、衣をふるってちりを落とし、いま詩の宴に臨んでいるのである。

前半は嵇康「秀才の軍に入るを送る」十九首其十四「目は帰鴻を送るは難し」と言ったという。(『世説新語』起句、「長来有名で、顧愷之が「手は五絃を揮うを画くは易く、目は帰鴻を送るは難し」と言ったという。(『世説新語』起句、「長天」は天空。王勃『滕王閣序』秋水は長天と共に一色。「側目」は、司馬遷『史記』蘇秦伝に「目を側めて敢えて仰視せず」とあるように、まともに見ないで目をそらすことである。あるいは嫉妬して横目で見るといふ場合も多い。いずれにせよ、ここにはふさわしくない語であるが、目を細めて、あるいは目を上に向けて、遠く眺める状態を表したかったのである。鴻が去るのを残念に思う気持ちではあるまい。「鴻」は雁や白鳥など大型の水鳥。承句、「五絃」は古代ぶりの琴。琴は七絃が普通であるが、『礼記』楽記に「昔者舜は五絃の琴を作りて以て南風を歌う」とある。転句、「自有・・・在」は、詩に頻出する表現。話題転換の時などに好んで用いられる。『玉台新詠』自ずから狂夫の在る有り」。また、禅語録でも頻出。『景德伝灯録』自ずから青山在る有り。禅の公案のような大仰さを狙った表現か。「浩」は、本来は水の広がる様。ここでは湖をわたる、雄々しく、人をして奮起せしめるような「風」に当てはめたのであろう。あるいは「詩思」にかかって、作者内部の「浩然の気」の如きものを指すか。韋応物『夕べに盱眙県に次る』浩浩として風は波を起こす。「詩思」は、第一百六首の注で既述。結句、「江閣」、杜甫『野望』野樹は江閣を侵す。「振衣」、

屈原「楚辞」漁父「新たに浴する者は必ず衣を振るう」。やがて、超俗的な志を持つことを象徴する詩語となった。左思「詠史詩」衣を振るう千仞の岡。朱熹「五禽言。王仲衡尚書に和す」其二「千仞の岡頭に一たび衣を振るう」。さあ詩を作るぞという感じか。あるいは、「楚辞」に立ち返れば、旅の塵を払って、旅館で一風呂浴びようという気持ちもこめているかも知れぬ。

全 耐雪 横山大 全(一百二十)

残夜湖光碧欲飛

残夜の湖光 碧飛ばんと欲す

看看祠樹帶朝暉

看看看 祠樹は 朝暉を帶ぶ

扁舟容与尋碑入

扁舟 容与として 碑を尋ねて入る

一棹松風滿客衣

一たび棹させば 松風 客衣に滿つ

夜もまもなく終わる頃、湖に反射した、緑色の光が、飛ぶように闇夜をつんざいた。やがて、みるみるうちに嫁が島の神社の木が朝日を浴びはじめ。その中を小舟が、ゆったりと、ゆらゆらと、碧雲湖棹歌の詩碑を尋ねてやってきた。一棹こぐ毎に、嫁が島の松から吹いてくるさわやかな風が旅人達の服に満ち満ちてくる。ああ詩人達よ、来たれこの地に。

起句、「残夜」と言えば、王湾『北固山の下に次る』「海日残夜に生ず」で、この句は張説が激賞したことで有名(『唐才子伝』)。ここも意識しているだろう。「残」は「のこっている」ことには違いないが、ほとんどそこなわれて「のこっていない」という気分が濃厚な語。「湖光」は用例の多い詩語だが、例えば李白『従祖濟南太守に陪して鵲山湖に泛ぶ』「湖光碧山を揺らす」。ここは湖が出たばかりの朝日を反射した光と考えてよからう。あるいは、朝日が出る前にゆつくりと湖面が明るくなっていく様を思い描くべきかも知れない。「碧欲飛」は奇矯な表現だが、あるいは沢山の緑色の光が飛び回って、それまで黒色だった湖面や山々を緑色に染めていくという方向で解釈すべきか。承句、「看看」はみる

みるうちに、だんだん。劉禹錫『楊侍郎憑の寄せ見るるに酬ゆ』「見る見る花の時は到らんと欲す」。「祠樹」、宋之問『桂州黃潭舜祠』「祠樹日光輝く」。ここにびったりなので意識しているかも知れない。「祠」は、既述（第一百十首など）の竹生島神社。「帶朝暉」の用例は少ないが、「帶夕暉」は詩で愛用される。司馬光『天外峯』「疎峯夕暉を帶ぶ」。転句、朱熹『舫齋』「扁舟容与たり小なる房櫳」。「容与」は第一百十二首訳注で既述。齊己『人の南に遊ぶを送る』「荒草の裏に碑を尋ねん」。查慎行『西溟竹垞同に房山に遊ぶ。余は約を踐むに及ばず。口占して之を送る』「古寺碑を尋ねて入る」。結句、「松風」ではなく「秋風」だが、陸游『書感』「一たび秋風に櫳として吾帰らんと欲す」。「櫳」は「棹」に同じ、また宋の宋祁『梅堯臣を送る』「秋風客衣に滿つ」。「松風」も詩で愛用される言葉。顏延之『陵廟を拝して作る』「松風は路に遵いて急なり」、杜甫『玉華宮』「溪は廻り松風長し」。隱者の陶弘景は「特に松風を愛して、庭院に皆松を植う。其の響きを聞く毎に、欣然として樂しみを為」したという。（『南史』「隱逸伝下」）。

嫁洲詩碑碑陰記

碧雲湖之勝、海内少匹、而嫁洲實為湖中絶勝矣。青松白砂、与湖光相映帶、晴好雨奇、使人恍然神遠焉。

碧雲湖の勝は、海内匹いするもの少し、而して嫁洲は實に湖中の絶勝為り矣。青松白砂、湖光と相い映帶し、晴好雨奇、人をして恍然として神遠から使む焉。

六道湖のすばらしさは日本で他に匹敵するものは少ない。さらに嫁が島はその湖の中でも特に絶景であると言うべきである。青い松白い砂浜が湖の景色と反映し合い、晴れの時は勿論良いし、雨の時もなかなか奇妙な味わいのある景色をみると、人はぼうっとして、魂が遠く飛んでしまうかのようだ。

原文に句読点、改行なし。段落に分けて解釈する。筆者の趣味で、助字（黙字）を音読みする訓読法を採用した。

文徵明『洞庭山に遊ぶ序』「洞庭両山は湖中の絶勝なり」。「海内」は、四海の内。司馬遷『史記』高祖本紀「威は海内に加えて兮故郷に帰る」。ここは勿論日本国内。「海内少匹」は、天下に並ぶものがないこと。「匹」はペアとなること。東方朔『客の難するに答う』「自ら以為えらく、智は能く海内無双なり」と同様。「矣」は現代中国語の「了」に相当し、基本的には「・・・になる」という語気を表すが、ここでは心の中や世評において「・・・と判断されるようになる」。だから、強い断定とみなしてよい。「青松」、「白沙」それぞれの語は、詩で多く用いられる。王維『香積寺に過ぎる』「日色青松に冷やかなり」。杜甫『禹廟』「江声白沙に走る」。しかし、「青松白砂」と熟するのは、恐らく海岸の景色を愛でることの多い日本ならではのこと。明治三十八年発表の武島羽衣『美しき天然』「海辺はるかにうち続く、青松白砂の美しさ」。「湖光」は第一百二十首の訳注で既述。ここでは、湖面の光を中心として、広く湖全体の風光を指すか。「映帯」は、照り映えること。王羲之『蘭亭集序』「清流激湍有りて、左右に映帯す」。高適『淇自り黄河を渉る途中の作』十二首其五「山河相映帯す」。「晴好雨奇」は、蘇軾『湖上に飲む。初め晴れて後に雨ふる』二首其一「水光激灑として晴れて方に好く、山色空濛として雨も亦た奇なり」に基づく。「恍然」は感動のあまり茫然自失するさま。「恍然」とほぼ同じ。江淹『雜体・述哀』「恍然として失う有るが若し」。「神遠」は、精神がこの世から飛んでいつてしまうような、恍惚感、超俗感を指すのであろう。丁仙芝『薦福寺英公の新たに禅室を構うに和す』「神遠くして日に事とする無し」。「焉」は、「ここに」とも訓じ、漠然と前の状況を受ける語気。語調を柔らかに整える役割を持つので、軽い断定とみなしても差し支えはない。

大正元年壬子十一月、石埭永坂翁載筆來遊於斯土、与我剪淞吟社諸同人、詩酒徵逐、文雅風流、極一時之盛。翁謂、勝事如此、不伝之後日而可哉。

大正元年壬子十一月、石埭永坂翁載筆を載せて來りて斯の土に遊び、我が剪淞吟社諸同人と、詩酒徵逐し、文雅

風流は、一時の盛を極む。翁謂えらく、勝事此くの如くなるに、之を後日に伝えずして而して可ならん哉。

大正元年（一九二二）十一月のことであった。文学の才豊かな石埭永坂翁がこの地に来て、剪淞吟社同人達と、詩作を共にし、酒を酌み交わした。その風雅な交流は、当時第一のものであった。翁が言った。「こんなにすばらしい催しがあったことが、後の世まで伝わらなくては残念じゃ。」

「載筆」はもともととは歴史官が文具を携帯して王事を記録すること。『礼記・曲礼上』「史は筆を載す」。ここでは、文人として、文学の材料を求めに訪問することを言っているであろう。「徵逐」の「徵」は人を呼び寄せ、「逐」は人を追いかけることで、要するに親しいものが、招いたり招かれたりして交流すること。韓愈『柳子厚墓誌銘』「酒食遊戯相い徴逐す」。「文雅」も「風流」も詩文応酬の雅やかなさまを言うのである。陸游『子長の呉太尉雲山亭に題すに次韻す』「文雅風流愛す可しと雖も」。王猷之は『風流一時の冠と為す』（『晋書』王羲之伝附）であったという。「一時」は、同じ時期、時期を同一にすること。蘇軾『凌虛台記』「其の一時の盛を計るに」。「勝事」は、すぐれたこと。王維『終南別業』「勝事空しく自ら知る」。

昔者尚書郎張謂遊夏口之南湖。顧李白曰、此湖古來賢豪遊者非一、而枉踐佳景、寂寞無聞。夫子可為我標以嘉名、俾伝不朽。白因号之、曰郎官湖云。想翁亦与張謂同感者歟。

昔者、尚書郎の張謂夏口の南湖に遊ぶ。李白を顧みて曰く、此の湖は古來賢豪の遊ぶ者一に非ず、而して枉しく佳景を踐み、寂寞として聞ゆる無し。夫子我が為に標するに嘉名を以てし、不朽に伝え俾む可し。白因りて之に号けて、郎官湖と曰うと云う。想うに翁も亦た張謂と感を同じくする者なる歟。

そういえば、そのかみ、唐の時代、尚書郎の張謂が夏口の南湖に旅行したとき、そばにいた李白を振り返っていった

そだ。「この湖は古代から、幾多の賢者や英雄が遊覧しにやつてきた。しかし彼らがせつかくこの名勝を訪れても何の役にも立たず、世間では全然知られておらぬ。寂しい限りじゃ。先生、私のために、すばらしい名前を付けてください。永遠にその名を残しましょうぞ」李白はそこで名前を郎官湖とつけたそだ。きつと永坂翁も張謂と同様の感を催されたのであろうか。

李白『沔州城南郎官湖に泛ぶ。並びに序』を要約した部分。この碑陰記全体の主旨ともかかわるので、煩を厭わず、その序と詩の全部を以下引用する。

「乾元の歳秋八月、白は夜郎に遷る。故人の尚書郎張謂の出でて夏口に使いするに遇う。沔州の牧杜公、漢陽の宰王公、江城の南湖に觴して、天下の再び平らくを樂しむ也。夜に方りて、水月は練の如く、清光は掇う可し。張公殊に勝槩有りて、四望するに超然たり。乃ち白を顧みて曰く、『此の湖は古來賢豪の遊ぶ者は一に非ず、而して枉しく佳景を踐み、寂寥として聞ゆる無し。夫子我が為に之に嘉名を標し、以て不朽に伝う可し』と。白は因りて酒を挙げ水を酌ぎて、之に号けて、郎官湖と曰う。亦た猶お鄭圃の僕射陂有るがごとき也。席上の文士、輔翼容静は以て知言と為し、乃ち命じて詩を賦して事を紀し、石を湖側に刻ましめ、將に大別山と共に相磨滅せしめんとす焉。

張公は逸興多く、共に沔州の隅に泛ぶ。当時秋月の好きこと、武昌の都に減せず。四座清光に酔い、歡びを為すこと古來無し。郎官此の水を愛し、因りて郎官湖と号く。風流若し未だ減ぜずんば、名は此の山と俱にせん。」

原文では「寂寥」を「寂寥」に、「標以嘉名」を「標之嘉名」に作る。郎官湖は、明代には涸れてしまったそだ。（商務印書館『辞源』郎官湖」の項）

「尚書」は唐代では行政の実務を司る中央最高官庁で、「尚書郎」はその副長官クラスの役人。張謂は盛唐の詩人。字は正言。（『唐詩紀事』。「夏口」は今の武漢市の漢口。「賢豪」は賢者豪傑。司馬遷『史記』刺客列伝（荊軻は）尽く其の賢豪の長者と相い結ぶ。「非一」は、一人どころではない沢山いるという感じ。「枉」は、木を曲げるといふ原義から、道理をはずれて、空しく、無駄にという意味へと發展していった。「踐」は、ふむことから足跡を残す、その場所に至るといふ意味に広がった。『莊子』讓王篇「其の土を踐まず」。「寂寥」また李白集の原文の「寂寥」ともに、華

やぐことなくひっそりとして寂しいさま。「無聞」は『論語』子罕篇「四十五にして聞こゆる無きは、斯ち畏るるに足らざる已」を本にして、名声も無く、人に知られないことをいう。名聞、令聞が無いと解釈して（すなわち名詞的に解釈して）「ぶんなし」と訓じてよい。「夫子」は、二人称の敬称として用いる。「可」は「・・・するのがよい」というニュアンス。「標」は、高く掲げる気持ち。目立つように名を付けて広く知らしめる。「嘉名」はよい名。『楚辞・離騷』の「肇めて余に錫（たま）うに嘉名を以てす」を意識しているであろう。「伝不朽」は不朽なる名を伝えるのか、伝えて不朽ならしめるのか、語の構造をつまびらかにしないが、要するに未来永劫いつまでも残すという意味の慣用句。張説『贈太尉裴公神道碑』「徳に報い忠を教うることに俱に不朽に伝う」。「云」は、句末に用いて上の文を結ぶ。ここまでが引用であることを示している。「同感」は、感動を同じくすること。現代日本語の「同感」よりも心動かされる度合いが強い。劉禹錫『德音を賀する表』「性を含むの倫、普天感を同じくす」。

今茲同人相謀、刻翁所作碧雲湖棹歌一首於石、以樹於嫁洲。則亦李白撰湖名之意也。自今以後、遊人觀此碑、而誦此詩、以流伝於四方、則碧雲湖嫁洲之著于世、豈啻郎官湖之比哉。而翁与我吟社亦不朽也。

今茲に同人相謀りて、翁の作る所の碧雲湖棹歌一首を石に刻み、以て嫁洲に樹つ。則ち亦た李白湖名を撰するの意也。今自り以後、遊人此の碑を觀て、而して此の詩を誦し、もつて四方に流伝せしむれば、則ち碧雲湖嫁洲の世に著わるることは、豈に啻だに郎官湖の比のみならん哉。而して翁と我が吟社とも亦た不朽也。

そういうわけで、今剪湊吟社同人が話し合つて、永坂翁の作『碧雲湖棹歌』一首を碑に刻んで、嫁が島に建立した。李白が湖の名を付けて郎官湖を永遠のものにしたのと同様の気持ちからそうしたのである。今後松江を旅行するかたがこの碑を眺め、この詩を朗読して、あちこちで言い広めてくだされば、六道湖嫁が島が世間で有名になることは、郎官湖の故事の比ではあるまい。さらには永坂翁と我が剪湊吟社の名前も永遠に伝わることであろう。

「刻石」、李白の郎官湖の詩（及び序）も湖の側の石（恐らく石碑）に刻まれたこと、先の引用部分にもあった。「流伝於四方」、蘇軾『青苗錢斛を給散せざらんことを乞う状』四方に流伝すれば、損ずる所細ならず。「翁与我吟社亦不朽也」も、李白の郎官湖の詩の末句「名は此の山と俱にせん」を意識しているのではないか。

同人使予題其由於碑陰。乃書以為記。大正四年歲在乙卯一月。村上寿夫撰 藤脇善政書 井亀泉刻

同人予をして其の由を碑陰に題せ使む。乃ち書して以て記と為す。大正四年、歲は乙卯に在り、一月。村上寿夫撰 藤脇善政書 井亀泉刻

同人諸君が私村上寿夫にその由来を碑の裏側に書くようにいうので、この文を書いて碑陰記とした次第である。大正四年（一九一五）、干支はきのとつ、その一月。村上寿夫撰 藤脇善政書 井亀泉刻

「乃」は、「かくして始めて」。同人の要請がなかったら私などは記を書かなかつたであろう。しかし強い要請があった。だからこそ書いたのだ、という気持ちをかこめる。「題」は題をつけて詩文を書き記すこと。「記」は文体の一種で、事をのべしるす文。例えば、陶淵明『桃花源記』。「碑陰記」と題するもの、顔真卿『東方先生画賛碑陰記』、蘇軾『李太白碑陰記』等多数。

剪淞吟社同人列名

横山耐雪 田代活処 並河適処 村上琴屋 木村湘雪 井上井蛙 中嶋秋圃 大淵蕉雨 渡辺秋濤 信太淞北
渡部桃蹊 井川収軒 藤脇松軒

附記

先日、嫁が島に渡って、碑文を実見する機会を得た。実物では、「井亀泉刻」の銘は「東京 井亀泉刻」として碑陰の左下に本文に離れて刻してある。また、「映」を俗字の「暎」に、「永坂」の「坂」を「阪」に、「棹歌」の「棹」を「擢」に作っていた。剪湊吟社同人列名のうち中嶋秋圃の「嶋」は「島」に作る。

また、碑陽の永坂石埭の詩は以下のように作る。

美人不見碧雲飛惆悵湖山

入夕暉 一幅淞波誰剪取

春潮痕似嫁時衣

碧雲湖擢歌十首之一石埭老人永坂周

最後の行は小字である。

本稿は、

二〇〇五・六年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「剪湊吟社資料の整理・保存及び同吟社の文学活動に対する実証的研究」(研究代表者 道坂昭廣 課題番号 17520229)

島根大学プロジェクト研究推進機構 二〇〇七年度『萌芽研究部門』「山陰地方における歴史・文化資源の発掘と活用に関する研究プロジェクト」(プロジェクトリーダー 田中則雄)

島根大学法文学部山陰研究センター 二〇〇七～二〇〇九年度 山陰研究プロジェクト「山陰地域古典文学資料の公開に関するプロジェクト」(代表者 蘆田耕一 番号 0701)

による研究成果の一部である。資料の収集に多大な援助を頂いたことに感謝する。

『剪淞詩文』の閲覧に便宜を図っていただいた島根県立図書館に感謝申し上げます。
そして、山陰漢詩の研究に私を導いてくださった入谷博士の学恩に感謝申し上げます。